

あそびの研究(3)

韓国における十八世紀のソビモの遊び

朴香俄

韓国における十八世紀は、国内外の圧力で社会的大世界観・国家観を克服して、社会的矛盾の改革、社会変化による現実的立場から新しい時代精神を持つべきことを、自覚していた。

その中で、李徳懋（一七四一—一七九三年）はこのような社会状況の中で教育改革の必要性を強く望んでいた学者として、教育が従来の封建支配時代の特別階層の所有物化から脱皮して、身分と職業を問に目を向けた時期として、すでにある先覚者は封建

わざに人間の陶冶のために解放化と、初学教育の大衆化へと転換することを強調している。彼の教育思想は代表的な著作である『士小節』（一七七五年）によく現れている。

『士小節』は子どものための教訓書・礼儀作法の指針書という性格から李徳懋の時代における子どもも観や教育観とともに理解できる内容を含んでいる。

『士小節』は、男子・女子・子どもにおいて正しく

実行すべき礼儀作法として、「士典」「婦儀」「童規」の三篇からなっており、「童規」篇は子どもが身につけるべき礼儀作法を、動止・教習・敬長・事物の四章にわけて細々と述べている。『士小節』を単なる教訓書としてみると、かなりでは礼の教育における規範的行動教育の指針の役割をする書物である

が、新しい観点からの解釈によると、『士小節』には子どもの遊びの様子や生活の実態に近い面が浮彫りになつてくるのである。

儒学者である李徳懋は遊びを観念的に捕らえた面

もあるが、『士小節』ではその当時の子どもの遊びを概念的な面だけで捕らえたのではなく、子どもの遊びの行為をあるがままに詳細に描いている。これらの繊細な観察力で述べている記録によって、私たちは子どもの遊びの世界だけでなく、子どもの日常生活の面まで理解することができる成果を上げたといえよう。当時の書籍として、『士小節』のように子どもの遊びや日常生活をこれほど細々と述べた本はまだ発見されてない。

ここで、『士小節』の「童規」篇を手がかりとして韓国における十八世紀の子どもの遊びの世界を覗いてみるとしよう。

〈『士小節』に現れる子どもの遊び〉

『士小節』「童規」には日常レベルでの遊びが多く描写されている。これらの遊びを性格的特色に焦点をあててその内容を紹介し考察することにしよう。

(1) 礼を損なつものとしての遊び

「子ども等は刃物や錐のような尖った鋭い器具を持つて遊ぶことを好むので、誤って体を傷つけ痕が残つたり、あるいは瞳に刺さつて片目になることががあるので、大人は常にこれを禁止すべきだ」（動止）

「でたら目に氷や雪を^{かじ}嚼つたり、雪水を固めたりするの^は容儀を損なうばかりでなく、頑固な病氣になりやすい。孔子は、『父母はただ子弟が病氣になるか心配する』と言つた」（事物）のように、男の子は作業用具や工具をもつて、遊ぶ機会が多い。特に、農業に直接携わった当時の庶民の子どもにはたとえば鎌なげ、釘うちなどの遊びがよく行われていたことを確認することができる。また氷滑り・雪だるま・雪なげ等は、子どもにとって冬の遊びとして盛んに行われ、楽しまれる遊びである。しかし、これらの遊びは身体に害を得て病氣にいたること

ともあり、その上、病氣は自分が苦しむばかりではなく親に不孝を招いてしまう結果となる。伝統的思考では、身体は祖先や親から頂いたものであるので、体が傷つき病氣になることは祖先や親に対しても不孝をする観念からのものであるといえよう。

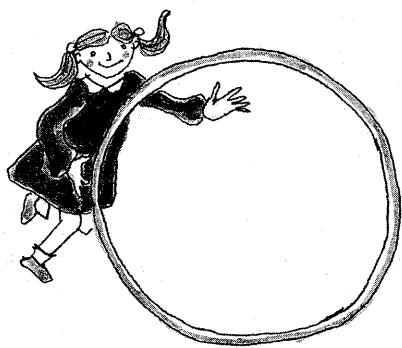
「軍吏が叫んだり腰をかがめたりする禮節をいたずら半分に習い覚えてはいけないし、梵唄、打令、許邪、囉、雜声もまた覚えてはいけない」（動止）のように、子ども達が軍吏の行為を真似して遊ぶ様子がうかがえる。しかし、公的な礼節を遊びとして軽薄に扱つて行うことに焦点が当てられて、これらのことを子どもがいたずらのようになめをしたり、遊びとして行うことは結果的に無礼な人間に育て上げる恐れがあることになる。

以上のように、これらの遊びは父子の礼を損なうものとして、あるいは君臣の礼を損なうものとして禁ずるべきと述べられている。

(2) 人間性育成を阻害するものとしての遊び

「将棋・圍碁・雙陸・骨牌・鬪錢・柵戯・意錢・從政圖・擲石毬・八道行成などを上手にできれば、父兄と友人はその才能と知恵を賞賛して奨励する。またよくできないと、人は皆嘲笑する」(事物)のように、将棋・圍碁・双六・骨牌・紙牌・柵戯・意錢・從政図・擲石毬・八道行成などは、子どもの競争心を助長し、勝ちたいという心理的背景を持つた遊びである。その中で、柵戯は名節の娯楽として、あるいは從政図は官職への興味を持たせて進取的な遊びとして認められて子どもの間には盛んに行われていた。これらの遊びは、かなり才能と機知を生かして遊ぶものであるが、遊びを知つていれば才量があると賞賛し、知らなければ人からばかにされることと、遊びを行ううちに学問ばかりでなく精神的状態も乱れ、競争心だけが助長されることと、あるいは骨牌や錢なげ等の賭博に陥ってしまって、財産を使い果たし、刑罰をうけるはめになる恐れがあるもの

である。このように子どもの精神を乱し、物質的に損傷をうけさせたり、学問にまで悪影響を及ぼすので、望ましい子どもの生活を當むのには適切な行



為でないと捉えられている。

(3) 禽習を産む源としての遊び

「凧上げは子どもを皆狂わせるので、もっと厳禁するべきである。凧上げをすると日が突出し、口が開き、頬が歪み、手があかぎれになる。また衣服は破れ、ぞうりや足袋も汚れる。人の家の垣根を越え、屋根を跨がり、崖から落ち、坑に陥ったり、また父親の紙や母親の糸を盗み、教訓に違反し、勉強を怠ける。甚だしきは勝負をかけるようになり、やがては互に殴ったり打つたりする。一つの遊びが百の悪習を身につけるようになる」（事物）のように、子どもが空を飛ぶ紙鳶を不思議そうに一生懸命見上げる瞳と、顔が空にむかって自然に開く口や、体が汚くなったり、傷がついても構わないことや、紙鳶について町や丘などを走り回る様子や、紙鳶を放さないと凧紐を握り人の垣根や屋根さえも怖がらず、上ったりして紙鳶を調整する様子や、空を飛ぶ

紙鳶を見上げている内に、足許の崖や溝も発見できず落ちたりする描写を通して遊びに熱中する姿、これらは李徳懋の観察力から生まれた生きた子どもの様子であるに違いない。このように李徳懋は、凧上げが興味深い遊びであることをよく見抜いているが、凧上げ遊び一つがすべての些細な礼節をおろそかにしてしまうことと、子どもの行為が乱れるばかりでなく体が害されること、親のものを盗むこと、勉強を怠ること、喧嘩をまねくことなど、凧上げという一つの遊び行為が百の悪習慣を招くことになる遊びとして、望ましくない行為として取り上げている。

(4) 生業の破壊としての遊び

「前に、家鳩（鶴飼）を熱心に飼っている癖のある人を見たが、彼は鳩飼いに陥って意志を喪失して生業も廃してしまった。鬪鶏も同じであって、これ又禁ずるべきだ」（事物）と記しているように、この

動物飼いは動物を可愛がったり、意図的ではないがこれらの行為をとおして楽しみを感じられるようである。昔から動物を飼うことは生計に困らない貴族階級の娯楽行為として行われたことが多かった。しかし、動物飼いは動物の可愛さに惹かれて生計を立てる意欲をなくし、やがては本職を忘却してしまう結果となる賭博のように思われていた。これらの遊びは学問と労作とともに大事にする著者の考え方には距離を感じさせるものとして、生業を手放して娯楽に陥つては困ることで当然禁ずるべき行為と捉えている。

(5) 真面目な学問的態度を侵害するものとしての遊び

「乱雑に墨汁を汚くぬつてはならない。雑物を本の間に挟んで置くな。余白を切り取つて使うな」(事物)、「地面に絵を描いたり、字を書くな。人がこれを踏むのを嫌うからである」(事物)、「指をもつて

空に文字を書くことは心が安定していない仕業である。筆に唾とか水をつけて硯の面や蓋に文字をでたらめに書いて散漫で秩序がなくなると、心もそれに伴つて乱れるので恐れるべきことである」(事物)と記しているように、日常の生活で行われる行為としてめったに記録には残るようなものではないが、李徳懋は、幼い子どもがきれいな葉、絵について、紙などのようなものを本の間に挟んでおき、大事にしているのをよくみている。また、子どもは字を憶え始めると字を地面に書いて字くらべをしたり、絵を描いて消す遊びをしたり、隠し絵・隠し字をして捜し当てる遊びが盛んになるのである。しかし、これらの行為は、字を憶え始める子どもに学習のために奨励するのではなく、文字や書冊、学用品などが子どもの遊び道具として利用されたり遊びの結果として浅ましく使われることは学問の不成功につながると判断しているようである。

(6) 悪戯としての遊び

「冬に火鉢を囲んで座り、火遊びをしながら灰に絵を描き鼻先や額に煤を付けたり髪の毛が焼け曲がることがあるが、これも一種の病氣である」（動止）、

「弓や矢を作つて、乱らに射るな。人の家に石を投げるな。火薬をもつて悪戯するな」（事物）、「客の驕や驥^{まき}を潜かに乗つて駆けるな。馬の尾の毛を抜くな。狂犬をからかうな」（事物）と記しているように、火遊び、灰遊び、弓、石投げなどの遊びが現われている。灰遊びや火遊びなどはいたずらによく遊ぶが、しかし危険であるのは確かである。このように、一般庶民の子どもには火を燃やしたり、灰皿を弄ぶことは日常的なことであり、弓・火薬・石なげなどは男の子によく行われる遊びでもある。結果的に、火遊び・弓・火薬・石なげなどの遊びは、子どもが扱うには危険であり、又、他人にまで悪影響を及ぼす可能性のあるものであること、馬にのつたり馬や狂犬をいじめることは動物の野性を引き起

こす結果となり、危険にさらされることも予想されるので禁ずる行為と捉えているようである。

(7) 生き物を弄ぶものとしての遊び

「樹の皮を生のまま剥ぐな。鳥の羽を生きているまま抜くな。障壁を汚すな。柱や敷居に画を刻み込むな」（事物）、「緑樹に上つて泣く蟬を捕まえるな。屋根に登り上がって雛子鳥を探すな。隣家の果実や花の枝を折るな。およそ、虫、鳥、草、木等一切生物を殺したり、傷つけはならない。これはただ、わたくしの良心を壊すばかりでなく、落ちて足を損ね折つたり、刺されたりしてその害は一つ二つでない。新芽や春の松の液を噛んだり、吸つてはならない」（事物）のように、ここには、花すもう、葉取り、蟬取り、巣取りなどのこれらの遊びから子どもたちの生き生きとした生活が見受けられる。しかし、生き物を弄ぶなどの生物が遊びの道具化する行為は望ましくないし、生活礼節観点からすると、これらの生

命のあるものを弄ぶ行為は徳目を育て上げる基礎時期としての子どもに望ましくない行動と見られたのであろう。



以上のように簡単に考察してきたこれらの遊びの描写には、子どもの日常生活での遊びが反映され、遊ぶ子どものいきいきしている様子が見受けられる。しかし、これらの遊びはすべて禁止すべき行為として捉えられている。その理由は、身分の区別なしに子どもであれば教育の対象となるという李徳懋の教育観から出発している。庶民の子どもは教育とは関わりがなく労作や娯楽を中心にして長い時間過ごしたともいえる。教育改革者である李徳懋としては、彼らの生活のなかで、感情的になりがちで奔放に動く人間にしてしまう可能性のある遊びを否定せざるをえないと思いつくことは必然であつたと思われる。

〈おわりに〉

以上の『土小節』に現れる遊びを考察することでき、幾つかの結論を出すことができよう。

第一は、遊びに対する否定的な観点があるにせよ、『土小節』のなかには当時の生き生きとした子どもたちの遊びを垣間見ることができる。彼は特別に子どもに关心を寄せようとしたり、子どもの遊びを概念的に捉えてから描写しようとする意図を持つていなかつたが、子ども特有の行為である遊びの世界が自然に目につき、放置された子どもとしては困るという観点から描写している様子から当時の遊びの様子や遊び観が見受けられる。

第二は、人間の能力や知識向上のための役割を果たす教育の一般化とともに、一般的な子どもにも教育が重要視されるようになり、教育的な行為と無駄な行為とに分離され、遊び行為は教育に害を与える無駄な行為となつていったといえよう。このような観点からすると韓国における十八世紀は遊びと教育が対立的関係ではあるが、二つの概念が相互関連的立場におかれるようになる始点であるといえよう。

第三は、『土小節』の時代の特徴は、子どもが教育の対象とか社会の様々な場面で顔を出し始めて大人の意識の世界に登場していた。すなわち、伝統社会では排除されていた庶民の子どもが実用社会で期待される存在として浮上してきたといえよう。期待されたものが、教育を通して秩序的で均衡のとれた姿勢と教養ある態度をもつ存在になるということであろう。このように子どもが教育の対象として「価値」をもつ存在だと映り始めたということは、それまでは無視されていた子どもの日常の生活ぶりがはじめて目に留まるようになったといえよう。

このように『土小節』の中には韓国における「子どもへの関心の表明期」としての特徴を導き出すことができるし、十八世紀を「子どもへのまなざしの変化期」として類推することができる。すなわち、子どもらが価値のない存在から価値のある存在へ

と、大人の無関心の対象から特別な関心を引く対象

として、子ども期のなかつたものから子ども期とい
う特有の時期を持つ者へと、手放されていた存在か
ら教育的配慮や指導を受ける者として、無関心から

大人の心理的負担感をもたせる者へと、無秩序の世
界から大人の統制を受けるべき存在として、感覚的

な遊び行為を振る舞うものから理性的に考えて行動
する存在へと、このようにこの時期の子どもの存在

はかなり変化の途をたどっていたといえよう。

第四は、『土小節』は、時流を敏感に感じた学者

の学問的成果であるばかりでなく、遊びを子どもの
教育との関連で言及することにおいて、子どもに関
する新しい視点を提示した意義深い書物である。こ
れからも研究されうる余地のある書物として、十八
世紀の韓国における子どもに関する精神史研究など
に重要な位置を占めるものと思われる。

参考資料

朴 香俄 「伝統社会の教育と遊び」 保育学研究 日本保
育学会（一九九一）

朴 香俄 「十八世紀の韓国における子どもの遊びに関する研究」 お茶の水女子大学 学位論文（一九九三）